幼児の集団構造に関する縦断的研究

加　茂　富　美　子

I　問　　題

幼児教育の主要な目的の1つは，社会性の発達を助成することである。したがって，幼児期における社会化の研究は，幼児教育にとって非常に重要な意味をもっている。この時期は E. B. Hurlock（2）がいうように「集団活動を始め，遊び仲間との同一化が進み，社会関係を認知し，他人の地位と自己の地位とを比較し，遊びの分担もできるようになる。やがて，他人の行為の規準によって自己を批判したり，自己の好悪によって他人の行動を批判し始める」飛躍的な社会的発達段階を画しているのである。即ち，乳児期における大人との受動的，従属的な交渉が，3才をすぎる頃から友だちに対する意識のめざめにより，交渉関係が変化する。一方，身体的発達に伴う運動的側面および言語的，情緒的側面において著るしい発達を示し，そのため友だち間のコミュニケーションがより容易になる。この両者が相まって，子ども同志の遊びが多くなり，ここに初めて対等の位置における友だち関係が成立する。

子どもが幼稚園，保育園のようなフォーマルなグループへ参加することにより，新しい環境へ如何に適応してゆくか，すなわち，ある程度の秩序をもった集団の一員として，同年輩の友だちと共に行動し，周囲の規則，秩序，要求に対して自己を適応させてゆくことを学習する。集団の一員としての役割の分担を通じて，幼児は相手の立場を認めることと同時に自己の地位を認知するようになる。

このような幼児の社会性の発達に関する研究は数多くなされているが，縦断的な研究に乏しい。この時期における社会性の飛躍的な発達の事実から，特に縦断的な研究の必要性が示唆されている。東京女子大学同窓会の経営している「幼児グループ」では，全園児が3年保育を受けることになっているので，この種の研究には最適の被験者が得られるわけである。そこで，3才から5才までの同一集団の社会的発達に関する縦断的な研究が企画されているが，本実験はその先駆的役割を果すものである。

J. L. Moreno (10) の考案したシオメトリック・テストが集団構造の分析に画期的な貢献をなしたのは周知のことである。しかし，幼児を対象とする場合には，この方法は一般に不適当であるといわれている。その根拠を次の3つに分類することができる。（1）ソシオメトリック・テストは質問紙法によるため，読み書きのできない幼児には無理である。（2）自己の属する集団成員の名前を熟知していなければ選択を正しく表現することができないから幼児には困難である。（3）好悪の感情が分化し，一時的な情緒に左右されないことがテストの前提となるのであるから，好悪感情の分化が不十分だとみなされる幼児には不適当である。

第1の根拠については，面接法を用いることによって，さらに，第2の根拠については，写真分類法を用いることによって，テスト法を幼児に適するように改めることができる。第3の点は，ソシオメトリック・テストを幼児に使用することの適，不適を決定する根本的な問題である。この問題を検討することが本実験の第1目的である。

H. R. Marshall 及び B. R. McCandless (3, 4) は，写真を使用した面接法 (picture-sociometric technique) によって，就学前児童を対象とするソシオメトリック・テストの信頼性を検討している。彼らのテストの結果が，幼児の交友関係に関する教師の判定（4）と，自由遊びの事態における幼児の交渉関係の記録結果（3）との間に有意な相関を示したことから，写真によるソシオメトリック・テストが幼児集団を予測できる尺度となりうることを確信している。

しかし，われわれは次の点を問題にしたい。Moreno ものべている如く「公式的 (official)，外面的 (external) な社会と，ソシオメトリック・マトリックス (sociomatrix) に示される内面的 (internal) な社会とは同一でない。」(9)。社会的に未発達な段階において，果して，交友の好悪が具体的な交渉関係と一致するものなのであろうか。換言すれば，遊びの事態における交渉の頻度で交友の好悪が決まるものなのか，あるいは，交渉の頻度という外面的なメジャーは，交友に対する内面的な好悪感情をはかる適切なメジャーではないのかもしれない。この観点からすれば，Marshall らの結論に至る前に，幼児の交友に対する好悪判断の信頼度を交渉の頻度とは別のメジャーで測ることをまず問題にしなければならない。そこでわれわれは，長短の間隔期間を交互に設け，同一幼児に5回の判断の反復を求めることにした。この実験計画は，短期間を隔てた2判断間の相関が，長期間を隔てた場合よりもことごとく高けれ

ば，幼児における好悪判断の信頼性が認められるとの作業仮説に基づいてたてられたのである。

その結果，われわれの仮定した通りの成果が得られたので，さらに間隔期間を変化して，テストの反復を継続し，1年余にわたる好悪関係の構造変化を辿ることにした。これが本実験の第2目的である。

II 方　　法

1，実　験　期　日

第1表の示すように総計8回の同一テストが反復されたのであるが，テストⅠ～Ⅴでは 0.25 ケ月（1週間）および4ケ月という短長の間隔が交互に2回ずつ繰返され，テストⅥ～Ⅷでは間隔期間に変化を与えた。この場合の間隔期間はテスト終了期から次のテスト開始期の間隔とはせず，継続している2つのテストの開始期間の間隔とした。これは，同一幼児をとりあげた場合，その幼児が次にテストを受けるまでの間隔を示している。

第1表　テスト時期及び間隔

テスト	時　期	間隔期間
Ⅰ	1959年9月	0.25ケ月
Ⅱ	1959年9月	4　ケ月
Ⅲ	1960年1月	0.25ケ月
Ⅳ	1960年1月	4　ケ月
Ⅴ	1960年5月	0.5 ケ月
Ⅵ	1960年6月	3　ケ月
Ⅶ	1960年9月	0.5 ケ月
Ⅷ	1960年10月	

2.　実験者及び被験者

実験者は筆者を含む2名の心理学専攻者でテスト開始前4ケ月，予備テスト，行動観察，自由遊びなどを通して被験幼児と接する機会をできるだけ多くもち，親密な関係を作るように努力した。

被験者は1958年4月に3才で入園した25名の幼児群で第Ⅰテスト開始期には4才乃至5才に達していた。第Ⅷテストの終了期までには5名の被験児の移動があった。

3.　実　験　材　料

a）写真：第Ⅰテスト及び第Ⅴテスト直前に，各被験児の上半身黒白写真を

2度ずつ撮影し，その幼児をよりよく表わしていると思われる方を，写真用コーナーで台紙にはりつけたものを用いた。

その各々の大きさは下に示す如くである。

写真：5.7cm（縦）×4.4cm（横）

台紙：9cm（縦）×7.5cm（横）

b）分類箱：19.6cm（縦）×9.8cm（横）×3.2cm（高さ）の箱3個。但し，全面に桃色・白色・紫色をはり，区別した。

4. 実 験 方 法

1）Marshall 及び McCandless (3, 4) は全成員の写真を4行5列に並べ，55cm × 63cm ほどの白い紙にはりつけ，それを座席についた時の幼児の目の高さのところの壁にはりつけ，その中から教示に適合した幼児を選ばせているが，われわれは，上述の全成員の写真を1枚ずつ幼児に手渡し，名前をいわせながら，所定の箱に分類させた。好きな友だちは桃色の箱に，嫌いな友だちは紫色の箱，好きでも嫌いでもない友だちは白色の箱に入れるように教示を与えた。

2）紫色の箱に分類された写真を取りだし名前を繰り返しながら被験児の前に並べ，その中で最も嫌いなものから順々に再び紫色の箱に入れさせる。原則としては第3位までであるが，自発的に選ぶ場合には制限を設けなかった。

3）好きな友だちについても同様の操作を行わせた。

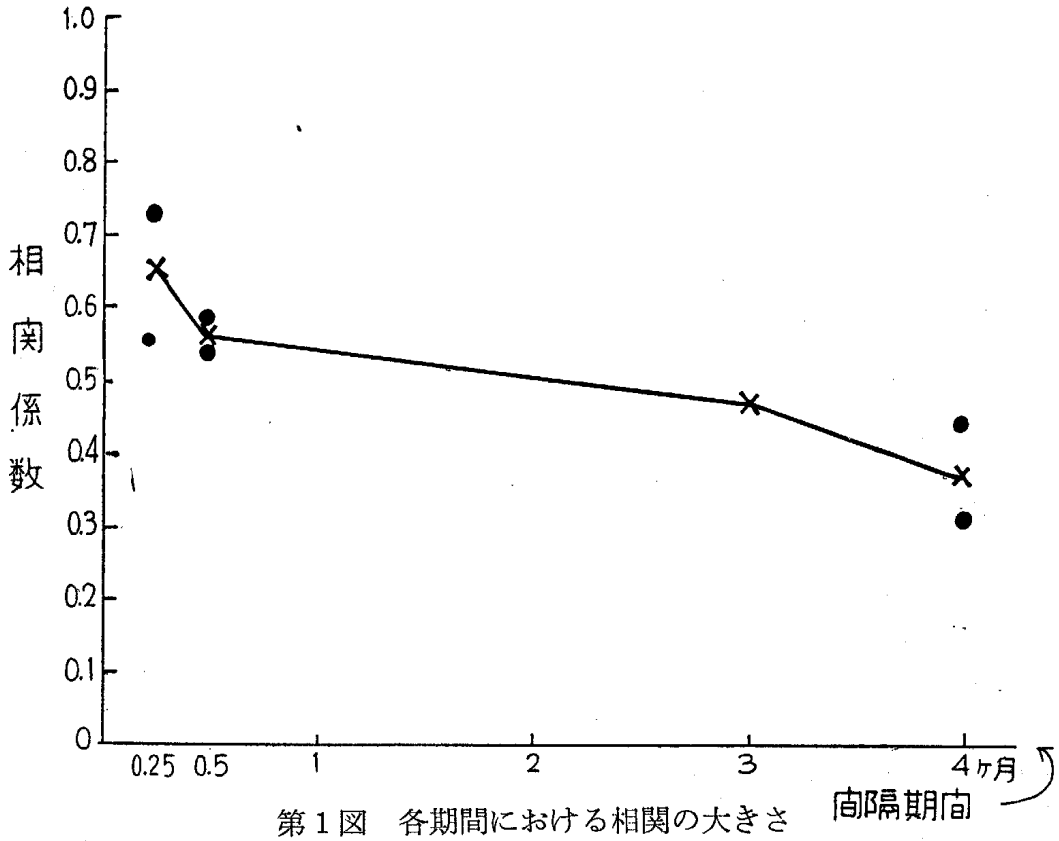
このようにまず大まかな分類をさせ，さらに両極の2群についてその中から3位までを選ばせるという2段方式をとることによって，5段階評定尺度を幼児の判断に使用することを試みた。

Ⅲ 結果 及び 考察

1. ソシオメトリック・テストの信頼性

われわれは，すでに述べたように，短期間を隔てた2評定間の相関が，長期間を隔てた場合よりもことごとく高ければ，幼児における好悪判断の信頼性が認められるという作業仮説をたてた。われわれの使用した写真によるソシオメトリック・テストの結果は，第2表の示しているように，この仮説を支持している。即ち0.25ケ月（1週間）の間隔では2回ともそれぞれ0.57, 0.72の相関が得られたのに対して，4ケ月の間隔では0.31，0.44となってい

る。さらに，間隔期間が長くなるにつれて系統的に低くなることを予測しつつ，段階の間隔期間を設けて比較してみたのであるが，その結果も，第1図に示されているように，予測通りであった。



第1図　各期間における相関の大きさ

第2表　期間と相関係数

間隔期間	相関係数	
	1回目	2回目
0.25ヶ月	0.57	0.72
0.5	0.54	0.58
3	0.47	
4	0.31	0.44

この結果からわれわれは，本研究で使用した方法によって幼児に，ソシオメトリック・テストを施行した場合には，幼児の評定はでたらめではない，即ち，ソシオメトリック・テスト自体の信頼性は高いといい得るであろう。テスト自体に信頼性があるとすれば，この相関を低くする原因はグループの変化によると思われる。幼児期における社会関係は不安定であり，このことは人間関係は変化しやすいといわれる一般説を裏づけるものである。

そこで，われわれは，この方法が，ソシオメトリック・テストとして信頼しうるという基盤にたって，幼児の集団構造を調べてゆくことにしたい。

2. ソシオメトリック・テストにみられる選択傾向の分析

個々の幼児が，その集団に属する他の全成員に対して，選択，拒否，無視という評定をそれぞれ8回行った結果得られた資料から，男児と女児の選択傾向の差異，ひいては，彼らの形成する集団の特徴について考察してゆこう。

a．選　択　傾　向

まず，8回のテストを通して性の同異による4種の選択―男児→男児選択，男児→女児選択，女児→女児選択，女児→男児選択―における選択数の平均及び標準偏差を示したのが第3表である。

第3表　選　択，拒　否　数

	選　択　数		拒　否　数	
	M	S．D	M	S．D
男児→男児	33	2.87	22	5.65
男児→女児	5.4	2.80	11.6	4.27
女児→女児	37.5	7.41	4.4	1.22
女児→男児	6.25	2.60	27.25	1.71

以下便宜上男児をM，女児をFで示すことにする。

1）M→M選択とM→F選択：平均は 33 と 5.4 で明らかに差が認められる。即ち，男児は女児よりも遙かに多く男児を選択している。

2）F→F選択とF→M選択：平均は37.5と6.25で，この場合においても明らかに女児は女児をより多く選択している。

3）F→M選択とM→F選択：この場合即ち，男児が女児を選択するのと女児が男児を選択する割合はほぼ等しいといえよう。

以上の3つの事実及び相互選択が同性間においてのみ存在する事実は，この時期における幼児の交友関係への関心が，同性に対してより強く向けられる傾向のあることを示していると考えられる。

b．拒　否　傾　向

次に拒否に対する傾向を調べてみよう。拒否数の平均及び標準偏差は第3表に示されている。

1）M→M拒否とM→F拒否：男児は拒否の対象として女児よりも明らかに多く男児を選んでいる。

2）F→F拒否とF→M拒否：男児の場合とは逆に，女児の男児に対する拒否が同性の女児に対するより圧倒的に多い。

3）M→F拒否とF→M拒否：上の2事実から判明することであるが，異性に対する拒否は女児が男児に対する方が，男児が女児に対するよりも遙かに多いことを示している。

4）M→M拒否とF→F拒否：ここにおいても明らかに男児が男児を拒否の対象として選ぶのに反して女児は女児を拒否の対象とすることが少いことを示している。

以上4つの事実は，拒否の対象として，男児においても，女児においても，両性とも男児を選ぶ傾向を示している。

これらの結果から，男児，女児のそれぞれの選択傾向及び集団の特徴を考えてみよう。

1）男児は明らかに女児よりも男児をより多く選択する傾向を示し，同様に拒否という事態においても女児よりも男児をより多くその対象としている。又相互選択も同性間に限られ，相互拒否も相当数（8回の合計は28例）見出されている。即ち，男児の交友関係への関心は同性間に集中しているように思われる。

2）一方女児においてはどうであろうか。女児も男児と同様，選択という事態では，男児よりも女児を明らかに多く選択しているが，拒否という事態においては，男児の場合とは異る結果を示している。即ち，拒否の対象は男児へと向けられているのである。相互選択は同性間においてのみ見出されたが，相互拒否は，拒否の対象がほとんど男児に向けられているため，女児→女児間の拒否は，この期間中1度も見られなかった。ただし，異性間の相互拒否はこの期間中10例見出された。

以上の事実から考えると，男児の関心の対象はほとんど同性に限られ，異性に対しては無関心な状態で同性同志の結合体を形成しているように思われる。一方，女児においては選択ということにより示される結合体は同性同志であるが，拒否という事態において示される男児への集中は，彼らが異性を排斥しながら同性同志のまとまりを形成しているように思われる。

何故このような差が生れたのであろうか。ここで幼児が友だちに対する評価を何を手がかりにして行うかが問題になってくる。交渉のある場面での交友に対する認知は，幼児期に於ては内面までおしはかることはできず，表面

に現われた行動のみがその判定の基準となるのではなかろうか。すなわち，交渉場面での利己主義的行動，攻撃的行動，けんかなどがその幼児に対する評価の基準となるのではないか。この故にそのような行動の顕著に現われる男児に拒否が集中するのではないかと思われる。

3. 小グループの分析

前項においては，交友の選択および拒否傾向にみられる性差について論じたが，ここでは，ソシオマトリックス及びソシオグラムによって，その中の更に小さなグループに対しての考察，及びそのグループが1年余のテスト期間を通じて，如何なる変化を示すかを調べてみることにする。

その前に，これら被験幼児群の構成メンバーについて述べておく必要がある。即ち，彼らは3才で入園した時より1年間（保育1年目）は，年長組及び年少組に分けられており，4才時（保育2年目）に初めて合併されたものである。年長組，年少組に属する成員は第5表に示す如くである。なお，アルファベットのAに近いほど生年月日の早いことを示している。

第5表　3才の組分け

組分け＼性別	男	女
年長組	A B E F H	C D G I J K L M
年少組	P Q S T V W Y	N O R V X
成員の移動	α：第Ⅲ期入園　年長児 β：第Ⅲ期入園　年少児 P：第Ⅳ期退園	Z'：第Ⅲ期入園 R：第Ⅳ期退園

1）ソシオマトリックスによる分析

われわれはソシオマトリックスを描くことにより，その集団内で各々の成員が占めている位置を知る。つまり，相互選択をなしてグループに属するか，選択あるいは拒否という形で他の成員から関心を示されておりながら，相互選択のない故に周辺児となっているか，あるいは，選択も拒否もうけない，即ち，誰からも何の関心も示されない孤立児となっているかがわかる。（第2図）

第2図は8つのテスト時期を通じての，各成員のクラスでの位置，即ち，グループに属していたか，周辺児であったか，あるいは孤立児であったかを一覧できるようにまとめたものである。この図によれば，いつも同じよ

1

グループ＼テスト期		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
所属者	Gm_1	F B A H	F B A	F B T A α β E	F B A α	F B T A Y α H	F T A Y α H S	F T A Y α B E W	F B T A α
	Gm_2	T Q U P	W Q U	W Q U	T Q	W U Q E	W Q U	Q U	W U
無所属者	周辺児	W E Y	T E Y H P	S H P	W U E H P β Y	P S β	B E β	H β S	Q H β E S
	孤立	S	S	Y	S				Y

第2図　各期におけるグループ成員　男児

2

グループ＼テスト期		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
所属者	Gf_1	J M C K L D G	J M C D G	J M C K L I	J M C K D L	J M C K D	J M C D	J M C L	C K
	Gf_2	V O	V R	V N O Z X	V N O Z X	V N Z	V N	V N	V N
無所属者	周辺児	N I X R	N L I K X O	D G	I G	L X G O	L K G I Z O	G D K O Z	J X L D G M O Z
	孤立児					I	X	I X	I

女児

うな成員がグループを形成していることがわかる。即ち，8つのテストを通じて次の4つのグループが比較的に固定して存在することが示されている。それらは，Fを中心とした高い年令の男児グループ（Gm_1），Qを中心とした低い年令の男児グループ（Gm_2），Jを中心とした高い年令の女児グループ（Gf_1），及びVを中心とした低い年令の女児グループ（Gf_2）である。（以下これら4つのグループを便宜上，Gm_1，Gm_2，Gf，Gf_2とする。）

更にこれら4つのグループがどのように変化してゆくかをおってみよう。

(1) 男　児　集　団

a）Gm_1：このグループの中心メンバーはF，A，Bであり，年長児の所属が多い。又このグループは，F，A，Bを中心に1つのグループを形成することもあり，各々が独立して別のグループを形成することもある。又Ⅲ期より入園したαもこのグループの重要な成員である。Ⅴ期からの年少児T及びYの加入，そこでの安定した地位の獲得も見逃せない事実である。

b）Gm_2：このグループにおいては，初期のT，U，Wの強力な結びつきから，TのGm_1への移動により，Q，U，Wにより支えられている。

Gm_1とGm_2の間の壁をつきやぶる，即ちグループ間の移動はTにおいて顕著である。初期にGm_2の一員であったが，不安定な状態を続けた（Ⅱ～Ⅳ期）後に，第Ⅴ期よりは完全にGm_1の所属メンバーとして認められている。

(2) 女　児　集　団

a　Gf_1：J，M，C，K，L，Dのいずれかにより構成されているグループであり，特にJ，M，Cの結びつきは強い。Ⅰ期においては，J，M，とC，K，Lからなる2つのグループであったが，以後合併され固定したグループを形成している。途中K，L，Dの出入りはあるが，J，M，CはⅡ～Ⅶ期まで必ずこのグループに属している。

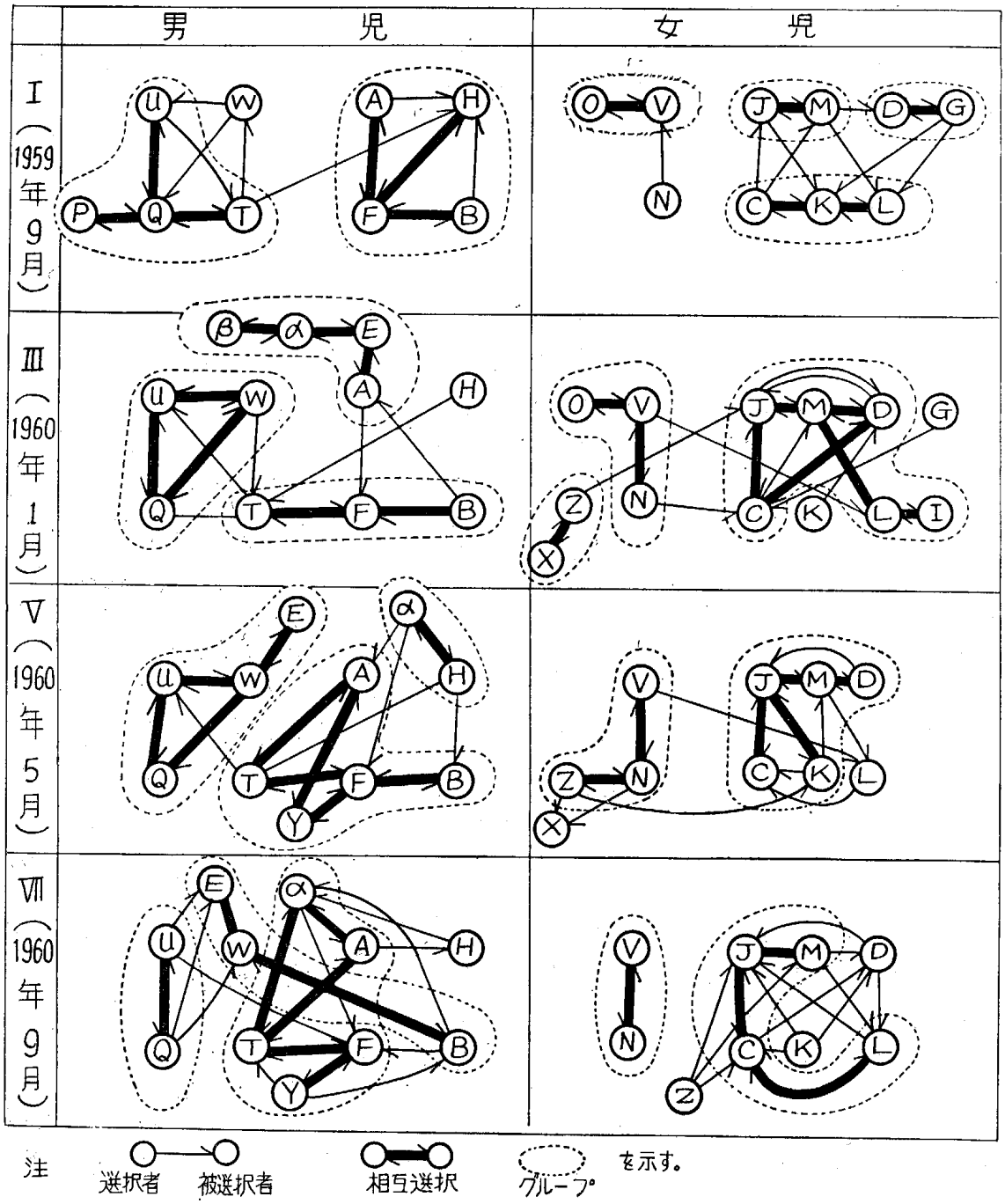
b）Gf_2：V，O，Nのいずれかの属しているグループである。初めの期間はVとNの結びつきが未だ現われていないが，Ⅲ期以後，VとNは必ずこのグループに属している。

これら2つの女児グループにおいては，男児グループにみられたようなグループ間の移動という事実は全く見られない。Gf_1にはGf_2のメンバーが一時的にでも加わったことはないし，逆の場合も存在しない。年長，年少の壁をつきやぶる現象が一度も生じなかった。

以上，マトリックスより相互選択で示されるグループのまとまりを考察したが，グループ内での牽引関係，グループ間の関係を更にソシオグラムによって調べてみよう。グループに参加しているメンバーのみをとりあげ，ソシオグラムをみやすいように簡略に示したのが第3図である。

Ⅰ，Ⅱ期，，Ⅲ，Ⅵ期，Ⅴ，Ⅵ期，Ⅵ，Ⅶ期はそれぞれ時期的に接近して行われたので，その中のⅠ，Ⅲ，Ⅴ，Ⅶ期をとりあげた。（第3図） なお，この際，男女間の交流は少数例のため省略した。

第3図　Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ期のソシオグラム



(1) 男 児 集 団

a）第Ⅰ期：3才時の組分けの影響が残っているのか，はっきり年長，年少に分れた4人ずつの Gm_1 及び Gm_2 が存在している。Fのスター的存在がみられる。

b）第Ⅲ期：FBは依然として強い結びつきをみせ，Hがはずされ，Tが初めて年長グループへ参加する。しかし，Gm_2 へ属する可能性を十分にのこしている。

Aは新入園児 α，β を加えたグループを作る。

Gm_2 においては，UQW の強力なまとまりをみせている。

c）第Ⅴ期：AFBTにYが加わり，Fを中心としたグループを形成している。

H，αとも上述グループへの牽引を感じながら2人のグループを形成している。

前回よりのU，Q，Wの強力なグループにWとのつながりにおいて，年長児Eがこのグループに加入している。

d）第Ⅶ期：Gm_1 は FTYAα となり，Tがその中心となっている。

このグループの強力なメンバーであったβは今期においては Gm_2 に属していたWと結びつき，前回よりのWEのつながりでここにBEWのグループを形成している。

Gm_2 においては，W が年長グループへ参加したため，残されたUQで2人グループを形成しているが，両者とも Gm_1 へ向う力を示している。

(2) 女 児 集 団

a）第1期：Gf_1 はこの期においては，未だJM，DG，CKLの2人あるいは3人のグループに分かれている。

Gf_2においては，OVの2人グループが存在する。（NのVへの志向がみられる。）

b）第Ⅲ期：前回の2人あるいは3人で形成されていたグループが合併され，JMを中心としてJMDCLIのグループを形成する。G及びKは除かれる。

Gf_2 においては，OVにNが加わり3人グループが形成される。

新入園児と年少児Xとのつながりもみえる。

c）第Ⅴ期：Gf_1 においては，前回のJMDCLIからIMがぬけ，Kが

加入，ＪＭを中心としてＪＭＤＣＫのグループを形成する。

Gf_2 では，ＶＮは依然としてグループを形成しているが，Ｏがそこからぬけ，代りにＺが加入し，Ｎを中心にグループを形成している。

d）第Ⅶ期：Gf_1 においては，一方選択は数多くメンバー間でなされているが，相互選択となるところが少なく，結局，ＪＣを中心とするＪＭＣＬの４人のグループを形成している。

Gf_2 においては，ＺＮのつながりがなくなり，Ⅲ期より継続しているＶＮの２人の強固なグループが続いている。Ｚはその力を全て Gf_1 に向けている。

以上ソシオマトリックス及びソシオグラムからこの集団に対する分析を行ったが，これらの結果をまとめると以下のようなことがわかる。

１）男児集団においては，年少グループの年長グループへの移動がみられ，次第に大きなグループに統合されてゆくように思われる。

２）女児集団においては，初期に形成されていたグループ，即ち，年長，年少のはっきり分れたグループの存続が強く，年少児の年長グループへの牽引は存在するが，グループへの参加は予想できない。

以上にのべてきたように，男女集団内にはそれぞれ年長及び年少グループが存在し，そこに属するメンバーは比較的固定している。即ち，男児においてはＦＢＡＴＹＸＱＵＷであり，女児はＪＭＣＫＬＤＶＮである。これらのメンバー及びそれ以外のメンバーのグループへの所属率を示したのが第６表である。

第６表によれば，男児グループにおいてはＹを除き，上述のメンバーは75％以上の所属率を示す。一方これ以外のＨＥＰβＳの所属率は37.5％以下である。女児グループにおいては，上述メンバーの所属率は50％以上であり，Ｚを除くＧＩＯＺＸは全て所属率37.5％以下である。即ち先きに示したメンバーが定ったグループに属する傾向があるのに反して，この10名は一時的にはグループに属し得てもそのグループの一員としての安定した地位を獲得できないことを示す。この不安定なメンバーが比較的長い間隔をおいたテスト間の相関を低くする原因であるようにおもわれる。したがって，集団全体としてみられた交友関係の不安定性は必ずしも下位集団すべての特色を示すものではない。

第 6 表　各メンバーのグループへの所属率

男児集団					女児集団				
グループ	メンバー名	所属	周辺児	孤立児	グループ	メンバー名	所属	周辺児	孤立児
		(%)	(%)	(%)			(%)	(%)	(%)
Gm_1	F	8(100.0)	0	0	Gf_1	J	7(87.5)	1(12.5)	0
	B	7(87.5)	1(12.5)	0		M	7(87.5)	1(12.5)	0
	A	8(100.0)	0	0		C	8(100.0)	0	0
	T	7(87.5)	1	0		K	5(62.5)	3(37.5)	0
	α	6 100.0)	0	0		L	4(50.0)	4(50.0)	0
	Y	3(37.5)	4(50.0)	1(12.5)		D	5(62.5)	3(37.5)	0
Gm_2	Q	7(87.5)	1(12.5)	0	Gf_2	V	8(100)	0	0
	U	7(87.5)	1(12.5)	0		N	6(75.0)	2(25.0)	0
	W	6(75.0)	2(25.0)	0		O	3(37.5)	5(62.5)	0
無所属	E	3(37.5)	5(62.5)	0		Z	3(50.0)	3(50.0)	0
	H	3(37.5)	5(62.5)	0	無所属	I	1(12.5)	4(50.0)	3(37.5)
	P	1(20.0)	4(80.0)	0		G	2(25.0)	6(75.0)	0
	β	1(16.7)	5(8.33)	0		X	2(25.0)	4(50.0)	2(25.0)
	S	1(12.5)	4(50.0)	3(37.5)					

（　）は百分率

上述の結果から，この4～5才という幼児期に，すでにかなり強固なグループが一部には形成されていることがわかる。つまり，一度そのグループの一員として認められると，比較的安定してそのグループに属していられるのであるが，それ以外の者にとっては，非常に入りにくいものとなっている。

4.　グループの大きさ

次に，グループを構成しているメンバー数についてふれておこう。第2図に8期を通じてのグループの大きさが示されているが，メンバー数でまとめたものが第7表である。

第 7 表　グループの大きさ

性別＼成員数	2 人	3 人	4 人	5 人	6 人	計
	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	
男	7 (33)	6 (29)	4 (19)	4 (19)	0 (0)	21
女	13 (75)	5 (22)	3 (13)	1 (4)	1 (4)	23
計	11 (46)	11 (25)	7 (16)	5 (11)	1 (2)	44

第7表によれば，男女とも最も多いのは2人グループである。しかし女児は全グループの57%を占めているのに対し，男児は33%にすぎない。その故に6人グループの1例を除いては全て男児グループの方が高率である。即ち男児グループの方がより多人数を包容するグループを形成していることがわかる。

以上，ソシオメトリック・テストにより示されるグループについての考察を進めてきたが，ソシオメトリック・テストは集団を捉える一方法にすぎない。前述のごとくMorenoも外面的な社会と内面的社会とは同一でないとのべている。その集団を適確に捉えるためには，内面的なものだけでなく，外面的な社会関係との両側面から追求されるべきであることが示唆されている。

ここにいくつかの問題が提起されている。即ち，

(1) 男女両方とも年長，年少のグループに分れているが，この原因は3才児の際の組分けにおいて異る組に所属したという経験が存続するためか，発達的な体力，能力の差によるのか，それとも全く別の幼稚園以外の場での原因に基くのか。

(2) 男児において，年少グループから年長グループへの移動は，ある種の能力が発達的に追いつくためなのか。

(3) 男児の方が多人数のグループを形成する傾向があるが，この原因は遊びの種類（多人数を必要とする遊び）によるのか。

われわれはさらに次の段階として，ソシオメトリック・テストと平行して実際の遊びの場面での行動観察を行っているのであるが，その結果は後の発表にゆずることとして，その際に上述の諸問題を考察したいと考えている。

Ⅵ 要　　約

幼児の社会性の発達に関する研究の第一歩として，その集団を分析する手掛りを得ることを目的とした。幼児に対しては行動観察が主としてとられている方法であるが，ソシオメトリック・テストもその一方法である。幼児においては不適当であるとされている原因をとりのぞくため，写真を使用した面接法をとり，ソシオメトリック・テスト自体の信頼性を求めた。即ち，長短の期間を設けることによりテストを施行した結果期間が長くなるにつれ，継続テスト間の相間は系統的に低くなることが見出されたので，この方法は幼児の判断自体には信頼性があるという結論を得た。

そこで，テストの結果から，この集団の分析がなされた。

(1) 男児集団と女児集団の結びつきは異っている。即ち，男児集団においては選択も排斥も対象は同性であるのに対し，女児集団においては，選択の対象は同性，排斥は異性へと向けられており，異性を排しつつ同性でのまとまりをみせている。

(2) これら男女集団内には，それぞれ年長グループと年少グループが存在し，そこに属するメンバーは比較的固定している。男児集団においては，年少グループの年長グループへの接近がみられる。

V 参考文献

1. 波多野完治編 児童心理学ハンドブック 金子書房，1958
2. 上武正二 新発達心理学 金子書房，1956
3. Marshall, H. R, & McCandless, B. R: A study in prediction of social behavior of preschool children. Child Develpm. 1957, 28, 148—159
4. McCandless, B. R. & Marshall, H. R: A picture-sociometric technique for preschool children and its relation to teacher judgement of friendship. Child Develpm. 1957, 28 139—147
5. 武政太郎：総説発達心理学 講談社，1958
6. 田中熊次郎：学級社会における「社会共感性」の発達と変容—教育心理学におけるソシオメトリー発展の方向—教育心理学研究 1955，3，133—145
7. 田中熊次郎：講座ソシオメトリー（1） 児童心理 1957，11，466—482
8. 田中熊次郎：講座ソシオメトリー（2） 児童心理 1957，12，566—586
9. 田中熊次郎：児童集団心理学 明治図書，1957
10. 田中熊次郎：ソシオメトリーの理論と方法 明治図書，1959
11. 山下俊郎：児童心理学 光文社，1951

後　　記

本研究に際し，実験計画をたてる初めより現在にいたるまで白井常教授の絶えざる御指導と励ましとをいただき，ここに心からの感謝をささげます。

なお，本論文は副島小百合氏との共同研究の一部を筆者の名において発表したことを附記する。本研究は現在，卒業生大城谷芙左恵，速水真知子氏及び幼児グループの菅沼静恵，吉田舒子先生及び筆者の5名の研究グループによって更に続けられている。

The longitudinal study of the development of the group structure in preschool children.

by Fumiko Kamo

We have been planning to investigate the socialization process in preschool children, and this is the first report of the research about the development of the group structure carried out during the last three years.

It is often said that sociometric score is a useful measure to know the group structure, but when we investigate the preschool childern, there are some difficuties to use this technique. Then we devised the picture-sociometric tests, suggested by Marshall and McCandless.

Twenty-six preschool childern of the Yôji Group (Kindergarten) of Tokyo Woman's Christian College were observed for one year. And eight sociometric tests were given to the Ss, the test periods changing from week to four months.

It was shown that the test-retest reliability of our technique was considerably high, so we analyzed the group structure based on these data.

Some sex differences were found through eight test scores.

(1) It is clear that the same sex get together, that is, they tend to choose the same sex as the intimate in both boys and girls.

On the other hand, their rejection score concentrate on boys, that is, both boys anb girls tend to dislike boys only.

(2) There are two groups, the older and the younger ones, in both sexes from the first time. In boys' groups, we observe some members moving from one group to another, but we do not find this fact in girls' groups.